

法然上人の數量念佛の意義

千賀眞順

法然上人以前に於ける日本淨土教の特色に數量の念佛修行が作善として注意せられる。即ち念佛信仰を量的に測定することで顯密諸宗の間に盛んに行はれた。

平安朝に入り願生念佛者がその數を増し、且つ唐宋との交通が盛んになり法相宗には善珠、護命、昌海等（往生極樂記第三）、三論には澄海、隆海、永觀、珍海等（極樂記、扶桑略記第廿二）あり、眞言には宣演、定昭、深覺、濟暹、聖惠、覺鑠（廣澤流）、良禪、實範、明遍、靜遍（小野流）等がある。特に天臺宗は摩訶止觀の四種三昧の作法に基て傳教大師以來常行三昧を修し、口に常に阿彌陀佛の御名を唱へ、心に常に阿彌陀佛を念ずれば佛に接し、その説法を聞くことが出来るとし、慈覺大師はその臨終に不斷念佛を遺囑したから法華三昧より常行三昧に重點を置いたもので注意を要する。觀岳要記第二によればこの常行三昧堂が東塔、西塔、横川に開かれ、漸次近幾地區に擴大増設され、慈慧、源信、覺運等の修道と相俟つて盛んになつて行つた。かく平安中期より末期にかけて宗教的興奮が高まつたがそれは時代の思潮が強く動かし且つこれを支持する末法思想が有力な推進力となつたことは史實の證明するところである。この常行念佛の波及すると共に數量の念佛が尊重される流行を

見たのである。思に作善の量的價値は人情の機微に基て首肯される自然の現象である。故に日本往生極樂記の四十五人、續本朝往生傳の四十二人、拾遺往生傳本末の百五十人、本朝新修往生傳の四十一人、高野山往生傳の三十八人等の往生傳收録者の念佛修道者に多分の數量念佛思想を發見するのである。信仰の價値が數量で計量される傾向がある。即ち義勢が毎日十二萬の念佛を勵んだと言ひ、源傳が夢中に南無一心敬禮西方極樂教主といふ稱名を三十六億一萬九千五百と唱へたなどは信仰を數量で精密に算出した事例である。又小豆念佛として庶民階級に風靡した數量念佛も刻明に計量されてゐる。即ち往生傳に尼妙法が年四十より毎日彌陀經、仁王護國品各一遍、觀音經十卷、念佛一萬遍を唱へた外、豆を以て念佛を數へ凡そ五十七斛三斗に及び嘉承二年八十三歳で入寂、又鞍馬寺の僧重怡が十四年間に小豆を以て念佛を數へ二百八十七石六斗に及び、又飛鳥寺附近の願西は小豆念佛七百石に及び、又藤原頼長は、二十五歳より毎年父の同向のため四百萬遍の念佛を唱へ他にも勸進して三千五百五十七石に及んだといふ。又かの慧心僧都は二十五三昧過去帖に二十俱胝遍（二億遍）の念佛を唱へてゐる。作善の量を競ふこの淨土教の性格は自力的、苦行的を免れ得ない。數量を強調する結果は不安は何時まででも繼續し遂に數とり念佛に陥らざるを得ない、當時の念佛三昧、不斷念佛乃至百萬遍念佛は貴族的な形式的な特殊な修道であること明了である。勅傳第四十六卷に法然上人六十五歳の建久八年、鎮西上人に三重念佛として「汝は天臺の學者なれば、すべからく三重の念佛を分別してきかしむ。一には摩訶止觀にあかす念佛、二には往生要集にすむる念佛、三には善導の立て給ひつる念佛なりとてくはしくこれをのべ給ふ」とある摩訶止觀の常行念佛

三昧、即ち止觀の一方法としての念佛、即ち數量本位を批判されてゐる。併し法然上人に見える念佛の數量は意義を全く異にする。

二

法然上人の教説并にその門原に念佛の數量が尊重されてゐる點が注意される。即ち勅傳第六卷に「源空は大唐の善導和尚の、をしへにしたがひ本朝の惠心の先徳の、すゝめにかまかせて稱念念佛のつとめ長日六萬返なり。死期やうやくちかづくによりて又一萬返をくはへて長日七萬返の行者なりとぞ、仰せられける」とあつて平生六萬遍、七萬遍の念佛を唱へられ、上人の傳燈を繼いだ聖光上人亦毎日六卷の阿彌陀經、六時の禮讃、六萬遍の念佛を勧められる、(勅傳四十六)、又證空上人は毎日淨土三部經を讀誦し、念佛六萬遍を稱する(勅傳第四十八)、兵部郷平基親は上人の教を信じて毎日五萬遍の念佛を怠らない(勅傳第二十九)、隆寛律師は彌陀經四十八卷、念佛三萬五千遍、後には四十八卷の讀誦を止めて毎日八萬四千遍を稱する(同上四十四卷)、相模四郎朝直は毎日六萬遍を誓約する(同上)。又後白河法皇は上人に歸し百萬遍の御苦行二百餘回に及び(同上第十)とある爲日課萬遍念佛乃至百萬遍念佛等の數量念佛を勧められて、摩訶止觀并に惠心流念佛に軌を一にする教説やに想察される。併し摩訶止觀や往生要集にあらざる善導所立の本願念佛を選取された法然上人の選擇集に「南無阿彌陀佛往生之業念佛爲先」と云ふて觀經下下品の「具足十念稱南無阿彌陀佛」の意によつて念聲は一の義に定め、彌陀本願の十念を稱名と判じ往生の決定業と確定せられた。單なる數量念佛と全く異質の念佛義を發見し「阿彌陀佛は、一念に一度の往生をあてをきたまへる願なれば、念ごとに往生の業となるなり」(禪勝房に示す御詞)。その故は選擇集に「釋

法然上人の數量念佛の意義(千賀)

迦・彌陀及十方の各々恒沙等の諸佛、同心に念佛の一行を選擇したまふ、餘行は爾らず、故に知りぬ、三經共に念佛を選びて以て宗教とするのみ」(第十六章)とて自力でない苦行でない、所謂數量でない、「一念に一度の往生をあてをきたまへる」佛の本願念佛こそ萬人が易修し得るもので、その念佛體驗より法然上人の數量念佛の意義が明瞭に規定されてゐる。故に拾遺和語燈下卷に「百萬遍の事、佛の願にては候はねども、小阿彌陀經に若一日若二日、乃至七日念佛申人、極樂に生ずるとかかれて候へば、七日念佛申べき候。その七日の程のらずは百萬遍にあたり候よし、人師釋して候へば百萬遍は七日申べきにて候へども、堪候はざらん人は、八日九日などにも申され候へかし。さればとて百萬遍申さざらん人のむまるまじきにては候はず、一念十念にてもむまれ候なり。一念十念にてもむまれ候ほどの念佛とおもひ候うれしさに百萬遍の功德をかさぬるにて候なり」と教誡し、念佛の日課數量も唯單に數量を尙ぶのでなく、名號相讀に意義がありとして「たゞ數遍の多からんには過ぐべからず。名號を相續せんためなり、必ず數を要するにはあらず。たゞ常に念佛せんがためなり、數を定めぬは懈怠の因縁なれば、數遍を獎むるにて候」(百四十五箇條問答)とあり、選擇本願念佛の意義の絶対價值を發見し體驗せる法然上人の念佛義に現れる數量の意義は數量を超へた上の念佛の數量でそのまゝ法然上人の宗教的特色を發揮せるものと言ふべきである。